

和服リフォームにおけるデザインの提案 その2

大裁ち女物袴長着からイブニングドレスへ

今 井 裕 子

Proposal for a Design to Reform Traditional Japanese Clothes Part2

Make an Evening Dress by a Lined Kimono For Women

Yuuko IMAI

Key words : 袴 Lined kimono, 和服 traditional Japanese clothes, アンサンブルドレス Ensemble dress, イブニングジャケット evening jacket

1. はじめに

家族の思い出が詰まった着物は単に保存するのではなく、被服構成学的視点からリフォームして利用しながら受け継ぐことを提案してきた。

前々報¹⁾では仮仕立の未使用大裁ち女物単衣長着から洋服へのリフォームとして、仕立て上がり丈が長く面積も広い絵羽模様の連続性を生かすデザインを考案し、「ガウン」を製作し報告した。また、前報²⁾では着丈が短く面積が狭い女物袴羽織をリフォームする場合として、ドレストップとラップスカートのセパレートタイプのイブニングドレスを提案した。

本報では、大裁ち女物袴長着を対象に、ドレスとしてリフォームする時に、洋服の製作で用いるベーシックな立体化の手法（ダーツやタックなど）を取り入れ体型を表現した工夫と、出来上がっている和服を直線に一箇所裁断するだけで、裾広がりドレスとする被服構成上の工夫を提案する。

これを広島文化短期大学（現在 広島文化学園短期大学）コミュニティ生活学科第10回卒業制作ファッションショーにおいて、教師賛助作品アンサンブルのイブニングドレス「初夏へ」として出品した。

2. デザイン

2-1 リフォーム対象和服の観察

(1) リフォームする大裁ち女物袴長着は、黄色地に赤・白・黄茶の大柄なボタン、緑色の葉をあしらった光沢のある総模様のお洒落着であった。この総模様を活かすこととした。素材は、表地、裏地ともにポリエステル100%であった。

(2) 大裁ち女物袴長着は、右衿、右前身頃、右後身頃、左後身頃、左前身頃、左衿と続き、たて方向の縫い目を解かずに利用した。

(3) 裏地をつけたそのままの形で長着を利用することにより、「裾ふき」をイブニングドレス裾ラインのアクセントにした。

(4) 被服構成の立体的手法であるタックやダーツを用い、ウエストが細いラインを出せるように工夫した。

(5) 大裁ち女物袴長着の仕立て上がりの身丈は、160 cmであった。この布地丈は、通常のドレス丈より長いので、ドレスと服飾品をとることができる。

(6) 袖丈は48 cmであった。袖底を解き、袖山の「わ」を利用し1 mの1枚布とした後、左右の袖付けを縫い合わせ、裳裾（トレーン）として利用した。

(7) 衿は広幅であり、解き広げると半幅で長さはおよそ2 mの一枚布になる。ドレストップの飾り布、さらに衿ぐりの見返しとして利用した。

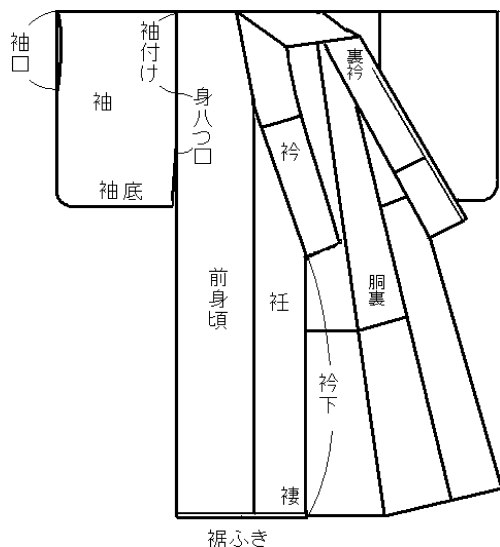


図1 大裁ち女物袷長着略図

2-2 デザインコンセプトと作品タイトル

(1) 長着丈が長いことを生かし、くるぶし丈のフォーマルウェアとして企画した。

(2) 光沢のある大柄な総模様のため、照明に映えるイブニングドレスとし、袖なし・衿なしのベアトップを採用した。

(3) 平らな総模様のドレス面に華やかさと立体感を出し、そして上半身に重心を置くために、ドレスの装飾として、ドレストップに飾り布をつけた。

(4) イブニングドレスの重厚さを演出するため、ドレステールに裳裾を付けた。フォーマルなアフタヌンドレスとして着用する時のため、この裳裾は取り外し可能とした。

(5) コーディネート可能なイブニングジャケットを組み合わせ、アンサンブルドレスとしてデザインすることにした。

(6) イブニングジャケットは、デコルテが隠れるように工夫した。さらに、アンサンブル着用時のアクセントとして、イブニングジャケットの裾に、赤のリボンを縫いつけた。

(7) 作品タイトルは、表地の暖色系の力強く華やかな色彩と冷ややかな光沢、そして装飾の華やかさが、まぶしい煌めきとこれからの暑さを予感させる太陽をイメージし、「初夏へ」とした。

2-3 造形上の工夫

- (1) イブニングドレスのシルエットづくりについて
 - ・ドレスは、長着下部(図2と図3の破線より下部分)を利用した。
 - ・長着の後身頃背縫いをドレス前中心にし、衿衿付け線をドレス後中心とした。(写真1・写真2)
 - ・長着の前身頃と衿をドレスの後身頃とし、ドレスの後テールをできるだけ広げるため、後中心となる衿下部分に長着袖をつけ、裳裾とした(写真3と写真4)。これにより歩くときクリノリンスタイルになる。
 - ・飾り布をビステラインにつけバストを強調し、

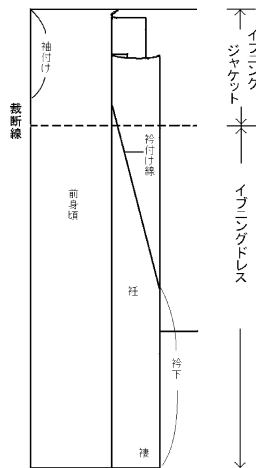


図2 長着前身頃裁断線

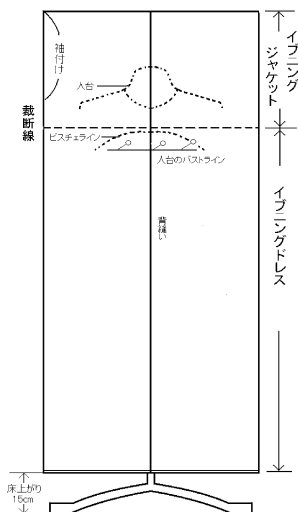


図3 長着後身頃裁断線



写真1 ドレス前姿

写真2 ドレス後姿



写真3 ドレス横姿
(裳裾付き)



写真4 ドレス後姿
(裳裾付き)

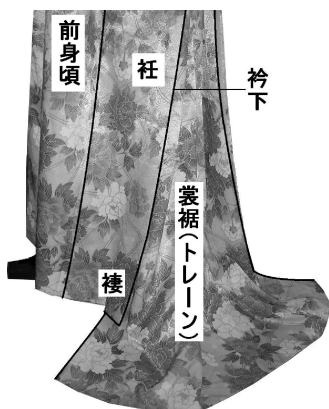


写真5 ドレス後姿(裳裾付き)における長着名称

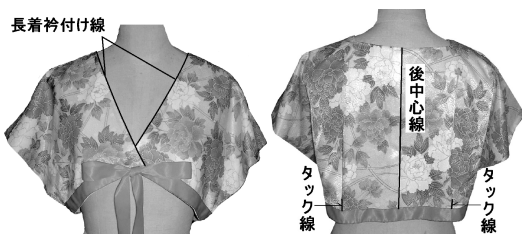


写真6 ジャケット前姿

写真7 ジャケット後姿

前身頃にタックを入れて、細いウエスト部分を作った。

- ・後身頃は、縦向きのダーツを4本、タックを2本入れた。ダーツの袋状になった箇所に、ライクボーン²⁾を入れ、ベアトップのドレスがずれ落ちないように工夫した。

(2) イブニングジャケットのシルエットづくりについて

- ・ジャケットは長着上部(図2破線より上部分)を利用した。
- ・肩幅はドレスの背肩幅/2より長い事を利用し、ショルダーポイントから下がるフランススリーブとした。
- ・ジャケット前身頃ネックラインは、長着の衿付け線を利用した(写真6)
- ・長着は、平面構成である。これに対し、ジャケット後身頃を立体化し、肩甲骨を包み込むため、後身頃の裾にタックを入れた。

3. 製作

3-1 イブニングドレスづくり

イブニングドレスは、長着から次のように製作した。

(1) 長着の表地と裏地がずれないように、身頃側と袖側の袖付けと衿付け付近にしつけをかけ、その後、衿と袖を解いた。

(2) 着装者の体型に近い人台を選び、着装者がパンプスを履いた時の肩の高さに人台の肩の高さをあわせた。

(3) 人台上に、ボディラインテープでビスチェネックラインを描いた。

(4) 図3のように、ドレスの裾が床上がり15cmで水平になるよう、人台のバストライン位置に長着の背縫いをドレスの前中心とし、待ち針で留めた。

(5) 人台の上で、ドレスのビスチェラインを確認し、縫い代1cm加えた袖付け止まりから6cm下(図2と



写真8 前身頃のタック



写真9 後身頃のダーツとタック

図3の破線を、水平に裁断した。なお、裁断した長着上部は、イブニングジャケットとして利用した。

(6) ドレスに利用する長着を人台に固定するため、人台の前中心とドレスの前中心、人台の後中心とドレスの後中心、人台の脇線とドレスの脇縫いの順に合わせた。

(7) 前中心、後中心、脇線を固定することにより余った布は、身体の曲面が変わる場所のウエスト部分で左右対称につまんだ。

(8) つまんだ布は、人台の形に合わせ、ヒップとネックラインに向かってそれぞれダーツやタック処理をし、写真8と写真9の位置になった。

(9) ネックラインからヒップラインまでの長さのライクボーンをタックでできた袋状の中に入れ、ライクボーンとタックを表に響かないよう縫い、固定した。

(10) インサイトベルト（芯）にカギホックを付けウエストベルトを作った。このウエストベルトをドレス内側でダーツやライクボーンを入れたタックの縫い目の数箇所のウエスト位置に、縫いつけた。

(11) ドレストップビスチェラインの飾り布は、長着の衿を利用した。衿の中心をドレスのネックライン前中心に合わせ、ネックラインに沿って、後中心まで縫い付け、写真1と写真2のようになった。

3-2 裳裾づくり

イブニングドレスの裳裾は次のように製作した。

(1) 長着の袖底を解き、袖付け側を縫い合わせ、1枚の布（裏地付き）とした。

(2) 裳裾製図は図4のように、たたみ幅5.5cmと6cmの2段のプリーツとした。

(3) 図5のように折りたたみ、プリーツの縫いどまり8cm、長さ96cmの取り外し可能な裳裾（写真3）をつくった。

(4) ドレスの後中心の明きどまりから2cm上の内側に裳裾上端を千鳥がけで留めた。

(5) 裳裾をドレス後の長着衿下の1cm内側に留め、その姿が写真4と写真5である。

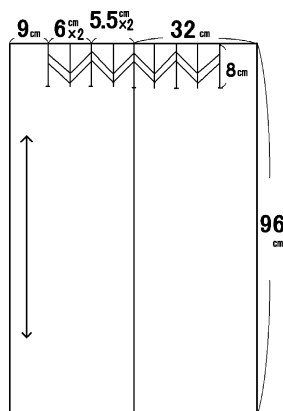


図4 裳裾製図

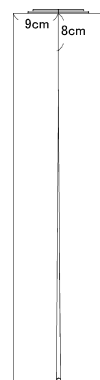


図5 裳裾のプリーツイメージ

3-3 イブニングジャケットづくり

イブニングドレスとコーディネートするイブニングジャケットは次のように製作した。

(1) 裁断した長着上部の袖付けどまりから身八つ口部分をまつり、イブニングジャケットの脇線とした。

(2) 長着袖付けをまつり、イブニングジャケットの袖口とした。

(3) 裾は縫い代1cmとし、折り上げまつった。

(4) イブニングジャケットを人台にのせ、後中心と、肩線を確認した。

(5) 長着の衿付け線をイブニングドレスのネックラインとしてそのまま利用した。写真6のように、なだらかなVネックラインとした。

(6) イブニングジャケットの後衿ぐり見返しは、ドレス飾り布に使用した残りの長着衿布を利用した。

(7) ジャケットの後身頃には、肩甲骨を包み込むため、裾にタック（写真7）を入れた。

(8) アンサンブルとして着装した時、アクセントとしてジャケットの裾に2.5 cm 幅の赤いリボンをまつりつけた。

4. 着 装

イブニングジャケットと裳裾を付けたイブニングドレスのアンサンブルは、写真11、写真12および写真13となった。

写真14は平成21年2月8日（日）に開催された広島文化短期大学コミュニティ生活学科第10回卒業制作ファッションショーに教師の賛助作品として出品したものであり、真珠のチョーカーとイヤリング、生成りのグラブをコーディネートした。

イブニングジャケットは後身頃にタックをとり、身体に合わせる工夫をしたが、フレンチスリーブのため特有のしわが観察された。

ビスチェラインに飾り布を利用することにより、バスト部分にボリュームが生じ、ウエストはより細く強調したデザインになった。

ビスチェラインの場合、ドレスの重みを支える場所がない。今回はライクボーンを前述3-1(9)のように使用した。ネックラインからヒップラインまでライクボーンを入れ、それをドレス内側のウエストベルトにつけた。これにより、ドレスの重さはウエストベルト



写真14 ファッションショーでの着姿
モデル 渡里 美希（卒業生）

にかかり、イブニングドレスのネックラインや全体のシルエットを保つことができている。

着装者が動くことによりイブニングドレス裳裾が床に触れて広がり、クリノリン風の優雅なシルエットであった。



写真10
人台に付けた裳裾



写真11
アンサンブル前姿



写真12
アンサンブル横姿



写真13
アンサンブル後姿

5. ま と め

大裁ち女物裄長着から洋服へのリフォームをする場合、以下のように被服構成上の工夫を行うことにより、イブニングドレスとイブニングジャケットを加えたアンサンブルとして製作することができた。

- 1) 長着の丈を利用し、ドレス丈とジャケット丈に分割する。
- 2) 裄長着の表布と裏布をそのまま裏付きドレスと裏付きジャケットにする。
- 3) ダーツやタック、ライクボーンを併せて利用し、ウエストを細くする。

- 4) 長着肩幅をそのまま利用し、フレンチスリーブとする。
- 5) 長着の両袖を利用して裳裾とする。

引用文献

- 1) 今井裕子, 和服リフォームにおけるデザインおよび縫製技術上の提案, 広島文化短期大学紀要 38, 1-7 (2005)
- 2) 今井裕子, 和服リフォームにおけるデザインの提案 紋羽織からセパレートタイプイブニングドレスへ, 広島文化短期大学紀要 40, 7-11 (2007)

Summery

I proposed ideas of making an evening dress and an evening jacket from a lined kimono for women.

Reforming a favorite garment that was inherited from one of his/her family members is a way of expressing one's gratitude and showing its usefulness.

The evening dress and the evening jacket were manufactured from the kimono for women with lining cloth. The Posterior shoulder width of kimono was made a French sleeve. Using a sleeve of kimono, it was made the train.